

日時:2019年12月21日(土) 10:00~11:30

場所:神岡町公民館

江馬氏館跡の建物復元

—遺跡整備手法としての建物復元—

講師: よしおか やすひで 吉岡 泰英

(一乗谷朝倉氏遺跡資料館 元館長)

1、はじめに

吉岡です。よろしくお願い致します。今ご紹介いただいたのですが私は一乗谷の遺跡に県立朝倉氏遺跡調査研究所というものが、そこに勤めていました。一乗谷は278haという非常に広い範囲が特別史跡に指定されていて、そこを調査・研究・整備を行うという組織です。今、奈良国立文化財研究所で平城宮跡等をやっていますが、その地方版という感じで、全国で言うと東北の多賀城遺跡調査研究所、「令和」で話題になった大宰府にも研究組織ができ、一乗谷とあわせて地方3か所で大事な大きな遺跡をしっかりやって行こうという組織ができました。そこには発掘をする考古学の人間、歴史全体を調べる文献史学の人間、そして私のようなそれぞれの遺跡を建築面から考える人間、そしてどういう風に皆さんに知っていただくか整備をする人間等、学際的に色々な専門分野の人間を集めて組織ができた。私も一乗谷で建築から遺跡を考えるということで毎日発掘もし、いろいろな事をやりました。そういうことを常にやりながら、そこにどんな人がどういう風に生きていたのか、建物はどうだったのかということを考えながら発掘・整備をやってきました。

そこで長いことやった経験の中で、あちこちからお誘いを受けお手伝いをし、県内ですと福井藩主のお庭だった名勝養浩館庭園、この庭園はアメリカの庭園雑誌で日本庭園ランキング3年連続3位になっていました。因みに1位は島根の足立美術館の庭園です。この養浩館庭園は戦争で焼失し庭も荒れていたのを、庭園の専門である私の上司と私とで調査をし、国の名勝にして復元整備してい



き、建物も全部復元して皆さんに喜んでいただいています。それから白山平泉寺です。白山への登り口は越前禅定道といって白山平泉寺から頂上へ登って行く道、それから加賀の白山比咩神社から登る加賀禅定道、それと岐阜県的美濃の長滝神社から石徹白を經由して登る道等あります。その中でも越前禅定道は京の都にいちばん近かった関係もあり、白山平泉寺は非常に栄えました。その遺跡を調査すると石畳の道等発見され、200haほどを史跡に指定し整備を始めました。ほかにも中世南北朝の^{そまやまじょう}杣山城跡等にも関わりました。小浜藩台場跡は、明治の前外国船が押し寄せる中でそれに向かって大砲を備えるため台場を作るのですが、それが非常によく残っているもので、残り具合を確かめ国の史跡にして更に整備していく仕事をやっています。それ以外にも武田氏の^{のち}後瀬山城跡や、福井県庁は福井城の本丸に立っているのですがその周囲の石垣やお堀が非常によく残っているので、これをどうするかということで、少しずつですがこれを復元するという仕事もして来ました。

この江馬は、1980年、指定になる前に調査をした時に一乗谷の研究所がお手伝いし、発掘調査と国指定に持って行くための報告書を作るという仕事を全て研究所でやった関係でお手伝いさせていただきました。1994年に旧神岡町で本格的に整備をやって行こうという機運になってから、毎年のようにここに来て発掘調査に立ち会い、どんな風な状況なのかを見ながら近年、会所庭園ができて上がったということで、現在までずっと手伝っている関係で今ここに居ます。

その他、一向一揆の城で有名な石川県の^{とりごえじょう}鳥越城も手伝っています。また、新潟県胎内市にある^{おくやまのしょう}奥山荘という中世の荘園の絵図のとおり建物の遺構が何箇所かあるということで国の史跡になっているところがあり、その中心部の^{えがみやかた}江上館の復元などのお手伝いをしています。それから群馬県の箕輪城、立派な山城の角馬出しが良く残っていてその二重の櫓門の復元をしています。現在は滋賀県の史跡小谷城跡や山口県の大内氏遺跡、近くだと高山陣屋の復元もお手伝いしました。中世が多いですが史跡の整備という観点で古墳などにも手を広げています。一方では建築の人間なので寺社の調査をやっていろいろな指定へ持って行く調査もやっています。たとえば福井藩主の寺である大安禅寺の伽藍一式を国の重要文化財にしたので、それを十数年かけて全部修復していく事業を始めてその指導委員会も手伝っています。

例に挙げた養浩館庭園の御殿は、全部戦争で燃えてしまっていたのですが、写真や江戸時代の図面が残っていたので、そういうものを見ながら元々はどんなであったかと思いながら復元設計しました。庭園もかなり泥で埋まっていたのを整備しました。それから先ほど言った福井城の一画に福井市立博物館があります。当初堀の形状は見えてなかったものを福井市が博物館と養浩館をセットで作ろうということで、発掘をやったら堀や石垣が非常によく残っていた。上の部分は積み直しましたが、この下の部分は地下に埋もれて残っていたものですから、博物館の当所設計を全てやり直してもらってこの堀と門を屋外展示として全て博物館の一角に取り込む整備をやりました。この堀が伸びて行って養浩館の一部となっています。それから県庁の裏にあたる福井城の一画ですが、入口に

本来「お廊下橋」といって、本丸の中と二の丸の中に藩主の住居があつて、それを繋ぐ屋根のある廊下で繋がっていることが分かっていたので、それを発掘調査し、わずかに残っていた写真などの資料を見ながらこれらをもとに県の事業として復元をしました。

鳥越城ですが、この城は大変面白くて、一向一揆と信長方の攻防戦を何回も繰り返していて、これはおそらく私が思うに石垣と礎石建物があるのは信長方の時期と考えていますが掘立柱のものと礎石の建物が何回も繰り返されています。奥山荘の休憩施設を整備した場所では、調査で建物のプランが分かっているので、これを休憩施設として、蔵と考えられる跡が有ったので、これを掃除等の作業をするのに道具を入れたりする建物として整備した。これは入口の門と入口の扉と土塁が回っている江馬館と同じ状況です。箕輪城角馬出しの入口ですが、礎石が非常に立派に残っていて、横の土塁との関係からほぼ皆さんが城と意識するような櫓門と読み取れるということでやったものです。この箕輪城というのは地域の方にとっては上杉方の城として有名だが、甲斐の武田と上杉の攻防戦や、関東の上杉との攻防戦とかを繰り返して最後に井伊直政が入って箕輪城中になって現在の高崎市役所のある所の高崎城に移して、それを作っている途中に井伊氏は彦根へ移されたという、そういう歴史を繰り返しているところで、これは最後の井伊直政時代の整備を始めたころのものだと遺跡から理解しています。そういう時代とかを考えながらやってきました。

2、遺跡整備手法としての建物復元

環境整備

今日のタイトルは「江馬氏館の復元建物」ですが、復元建物にはいろいろあつて今年は首里城が燃えたのが非常に注目を浴びたと思いますが、復元建物の大半は遺跡をどう整備して皆さんにその情報をお伝えするかという観点から考えています。遺跡をそういう風にやって行くことを環境整備といいますが、そんな中でどういう風に考えて行くのかということを皆さんにも知って戴かないと、あの建物がなぜあのように作られたのか、なぜその一部なのかということもなかなかご理解いただけないと思います。そんな意味で環境整備というものは、どのように考えてやってきているのかお話ししたいと思います。

「遺跡を整備する」ということの大前提は、残された遺構、一部地上に残っているものもありますが、そういった物を確実に保存してそして史跡の環境を構成する要素を含めて整えて皆さんに知っていただくように行ういろいろな作業すべてを含めて「環境整備」といいます。その計画を考える為には、なにが大事なのかを考えないといけない。その基本に考えているのは、「①遺跡整備の範囲を考えること」がまず大事だと思います。例えばこの江馬館で考えた場合、江馬氏の城館跡で国の史跡になっているのは周囲の山城と江馬氏の館など色々なものも含めて非常に広いです。そこでどんなふうを考えて行くかという、全体を常に考えて行こうということです。第一段階では今回整備した時には、山城まで手を広げて行くことはコストの問題、皆さんがどう維持してどう活用していくのかな

どを考えた時になかなか難しいところがある。今回は江馬氏の下館に限ってやって行こうと。でもその中でどうするかといった時に周囲にも指定地は広がっているし発掘調査で堀の外側にもいろいろの物があるということが分かって来ましたので、そういった物も含めてどんなことをやるのかという意味で「②保存整備と復元の程度」という風に書きましたが、今回は堀の外はいろいろな事を考えて草地に近い状況にしましたが、あそこに馬屋跡や工人の刀工房に当たるものではないかと思うようなものなどが出ている。しかし、それらをどう考えどう見せるか考えたら、すぐ調査整備をやって行くのは難しい。その中で最終的には堀で囲われた館の中を基本的には押さえて行こうということにしました。江馬氏の庭園を持った館という特徴を考えると、庭園を巡る周囲の空間が分かるように整備しようと絞っていった結果があのようになっていると理解していただいたら良いです。

そしてもう一つは「③全体を見据えた対応」ということです。遺跡を守るために、下にもう一度埋めるとかいろいろな方法があります。例えば一乗谷は非常によく残っていて建物の礎石だとか溝や石垣がそのまま残っていましたので、発掘をやってそれをそのまま本物を見せて行こうと最初に大きな方針をとりました。平城宮跡では建物の柱穴しか残っていないので近年では朱雀門や大極殿を復元していますが、それ以前は柱の位置だけを植栽で示すような整備だとかいろんな手法がある訳ですが、そういったことを考えながらやっています。また一方では土を盛って行く中で地形が変わるのではないかと、大きく盛れば盛る程当時の人が生活していた面とは違ってくる。例えば1m高く盛ってしまえば見る角度も変わるし、周囲の地形との関係も見え方も変わるだろう。でも遺構を「守る」という中でその関係をどう持って行くのかという問題があります。江馬の場合、庭園は本物の石を使っていますし池も見せていますから、それと周りの建物をどうするかということになる。高さの差はたとえ20cmでも雰囲気考えると非常に大きな問題になってきます。奈良の宮跡庭園でも一部「曲水の宴」みたいな庭園が出てきて周りに建物があるというものを復元した時に、庭園は本物を見せていますが、建物はしっかりしたものを作ろうとすると基礎だとかそういうことがあるので遺構保護上1mくらい土を盛っています。しかし、その建物から庭園を眺めようとした場合建物の雰囲気は当時と変わって来ます。復元した建物から眺めた庭園、または庭園から眺めた建物の雰囲気は本来の当時使われていた状況とは変わってくると思います。養浩館庭園では本物の庭園に本物の礎石を使って復元しています。一乗谷でも町並みのところは最初に試験的に武家屋敷一棟分だけを実験的にやったが、その時には以前の考え方で遺跡を保護するために土を盛ってその上に建物を建てる。本物は土の下に残されている訳ですが、今回それを町並み復元ということで200mの範囲で復元し一乗谷の特徴である計画的に作られた都市遺跡がそこに残っているんだということ。それが整然と配置されていることを見ていただくためには、本物の出てきた道路200mとそれに面した町並みをつくって道路を歩く限りは周囲の山までもが全部本物ですよという計画を立てました。でもあそこを200mにわたって全部盛り上げてしまったら周囲とのバランスが崩れるんじゃないかという中で、一乗谷では本物の門の礎石、石垣、建物遺構を使ってその上にそのまま当時の手法を考えながら復

元しました。それを更に進める形で養浩館では、庭園とのバランスを鑑みて、本物の礎石を用いて建物も復元しました。そういった意味で全体を見据えてどういう風にやったらいいのか常に判断しないといけない。

それともう一つは江馬氏館でも同じですが、第1期の整備をやりましたが、次にはどうしたらいいのか周りの山城のことや建物を利用していただく上で不便はないかとか考えながらやらないといけない。遺跡というのは周囲に建物が建ったりして常に環境が変わってきます。これが「④遺跡は常に変化していることが前提」ということです。例えば江馬館で言えば建物から庭を見ると現代の看板等が見えるので、それを見えないように無くすことはできないのか、それが無理なら植樹するのかとか、いろいろな事を常に周囲の社会がどう変わっていくのか考えながらやって行く必要があります、それはある意味維持管理の仕事に近いと思います。草刈りが大変ならどの程度にすればいいのか、木もどのくらい植えるのか。カンカン照りでは困るが木を植えて根が張り地下の遺構が壊れても困ります。「ピスタ」といいますが目線の確保を考えながら、木陰は欲しいと思い木を植えつつ、人間の目線を確保しないといけないので目線の高さより下の枝は払った方がいいとか、木陰を保持しながら警備上の観点から目線の高さまでは見通せるようにした方がいいとか、いろんなことを考えながら維持管理していく。そういう意味で遺跡は作ってそこで終わりではない。木も伸びるし、雪害など考えて行く必要がある。また整備した遺構も、堀の斜面を固めたりしているもの気候の変化などで崩れたりするし、新しい技術も出てくるだろう。そういう中でどんな材料をどう使って行くのか、常に日々研究と更新が必要だと思います。そんなことを考えながら遺跡は整備していく必要があると思います。

ここでもう少し詳しく一乗谷の話をしていきます。一乗谷遺跡は、足羽川の支流・一乗谷川に沿った場所に位置します。そして一乗谷の山城は周囲の尾根の上であり、奥にはもう一つ周囲を囲むように山城があって西の山にもいろんな櫓があります。この一乗谷の「城戸の内」という閉鎖された区画があって、ここから見たときに地形が変わらないようにしたいということでこの尾根を少し超えたところまで広げた非常に広い範囲を指定しています。この40年は麓の遺構を調査してきました。下の城戸は入口から大きな石垣があって直角に曲がって入ってくるのですが、発掘時に石垣は残っていましたが一部は壊されて下に落ちていました。その石の落ち方をチェックして、どこからどういう風に落とされたのかを推定しながらどこへ積み直したらいいかということ考えながら積み直しました。一番大きい石は当時そこに水を流していたので石の下が洗われて石が傾いていたので戻そうとした。設計上30tのクレーンで何とかできるかと思って用意して積み直ししようとしたのですが、石も少し動いたがクレーンの方も危なくて慌ててずらす工法で据えなおしました。30tを超える石を500年前に石を動かし積んだという技術も見えてきました。上の城戸もあるのですが、その間1.7kmの所に都市が広がっている。ここで発掘を広くやったら道路跡が出てきて屋敷等もあると分かってきて、この寸法を見たときにだいたい106m位ですので寸法で350尺になるかと思っています。計画は上城戸と下城戸の1.7kmを8等分し、それが700尺あって半分350尺が106mという寸法になると考えていますが、

建物の一間の寸法や道路の間隔や、当時の人がどういう考えのもとにそれを作って行こうとしているのか、建築をやっている人間として当時の人は何を考えていたんだろうということを気にしながらやっています。その中で一乗谷の館は非常によく残っていて、本物の礎石が見えています。真ん中に四角い花壇があってここに茶座敷と思えるものがある大きな庭園があって中庭を仕切る塀がある。現在のお茶の世界で言う面坪^{おもて}ノ内と流れの蹲^{つくばい}と茶座敷と主庭園が出揃ってくる一番初期の例だろうと考えています。長方形の花壇は西洋式の物だと思われるかもしれませんが、室町時代末期に一乗谷にあったのです。朝倉氏当主が一乗谷に最後の室町将軍を迎え大宴会をした記録が残っていて、「奥ノ十二間」つまり24畳敷きの部屋で大宴会をやっているのです。その座敷から見える三辺は全部笏谷石^{しゃくだに}という凝灰岩のきちとした切り石で作っている。それに対して後ろ側は、川原石や自然石の玉石で作る。それから面坪ノ内は仕切りの塀があって箱の柱受けを作って柱を受けていますから、塀は全部取り外しができるのです。更に建物の縁側の先に当たるところには東石との間に仕切りの石を入れるのですが、それも繋がる場所までは切石でやっとながら、ここから先は玉石に変えている。いわゆる楷書・草書のようなそういう関係も建物で全部作ってくるというような詳細な設計をしているということが分かっています。ここは残り方が良いので建築を考えて行くとき非常に面白いところです。復元の街並みを望む場所も整備しました。それから一乗谷は特別名勝になっている庭園が4つあり、朝倉館跡庭園、湯殿跡庭園という館の上にある庭園、諏訪館跡庭園という義景の妻のために作った諏訪の御殿の庭園、そしてもう一つが糸桜を見て宴会をやっていた南陽寺の庭園です。また、家臣の屋敷にも庭園があり、非常にたくさんの庭園が残っています。

そういう遺跡なのですが、真ん中に一乗谷川があり、川というのは護岸や氾濫が有るので遺跡指定地に含まない場合が多くあります。そうしないと河川管理者も自分の仕事がやりにくいということもあるのですが、一乗谷は川も含んで遺跡だということで全部指定地に含んでいます。ですから河川改修の話の時にどういう風にこれらを改修するのか考えて、当時の建設省や文化庁と相談しながら、どういう整備をやるのか考えました。護岸は発掘調査でかなりの部分で自然石のものが出ているので、全部自然石を積んで整備していく事業を遺跡の仕事ではなく河川の仕事として実施しました。監督は私がしながら石垣を積み直したり、どんな石を使うとか石の素材を現場まで見に行ったりとか、そんなとこまでやって河川整備をしました。それをやったら一乗谷の大水害でかなり壊れましたが、これまでやってきたところは大丈夫で、それ以外の以前にやったコンクリートの護岸は全部壊れました。やはりこれで行こうと今その方向で進んでいます。ちなみにこの河川整備事業は一昨年の土木学会の最優秀景観賞をいただきました。この水害の後で谷が崩れるなどしたので砂防ダムを造らないといけなくなった時に、できるだけ目立たないようにするために、表面もコンクリートではなく石を少し入れ、規模や水量とか大きくないといけない場合だと目立ちすぎるので規模を抑えて2つにするとか、そういう土木計画にも相談しながらやってまいりました。一乗谷ではこのような形で進めてきました。

遺構整備手法としての建物復元

発掘調査をやった時にはいろいろな資料が出てきます。これは直接資料と間接資料と呼んでいるものに分けられます。直接資料は発掘で見つかる建物跡で、柱や建具も運が良ければ出て来ることがあり、これらを直接資料と言っています。間接資料というのは全体の地形がどうかとか建物の配置とか出てきたものから当時の生活を考えたものを言います。それでもまだ足りない場合、関連資料というものもあります。それは当時のそれに近い現物が残っていたり、絵巻物などいろいろな資料に書かれていたりしないかということです。

例として一乗谷の話をする、両サイドの塀の遺構、そしてそれを切り取るようにある門建物礎石が4つあって、前が大きくて後ろが小さいというようなことが見えてきます、ここから何を考えるかというと、ここへ屋敷を区画する土塀が有るので道路側に門の扉があるだろう、間口が8尺で奥行が4尺の配置だから奥側は控え柱かと考えたりして出来上がってくるのが一つの門の形。町屋の遺構なのですが幅の広い道路があって側溝があって屋敷を区画する溝があります。建物内には大きな穴が空いていて、これが何かと言うと大きな甕があった遺構でここにまだ甕の底が残っています。井戸もあります。礎石は周囲にはたくさんありますが、中には一つしかありません。これは間口2間半の建物で、ちょうどこれを二つ割りにする真ん中にしっかりした礎石があって後ろ側も同じように真ん中に礎石がある。2間半なので普通の建物で考えると、1間・1間・半間となるのですがここはちょうど2等分している。2間半の真ん中1.25間に柱を建てるということはここをかなり重要視した建物構造だと考えます。もう一つは屋敷の敷地境には溝があって、かつ隣との間は1尺ちょっとしか無い。そうすることを考えると、これは屋根が正面から屋根の三角形の部分のみえるように建てた妻入りの建物で、真ん中に柱があるということは柱が棟まで登ること。そう考えないといけない。妻全体に梁をかけて、その上に棟を支える束を持って来るなら柱はどこに立ててもできるのですが、わざわざ真ん中にしているということは構造的に上まで上がると考えた方が素直です。そう考えながら京都の町家や大津の堅田の絵図むなもちばしらなどの資料を見ていきますと、棟持柱むなもちばしらとか真ん中に棟を支える柱を持った町屋が何軒か見えてくる。そういうことから建物の構造を考えていくというようなことです。

それから一乗谷で敷居が出てきました。一方はよく残っていますがもう一方は少し腐っています。これには3本の溝があって2本は狭くて深い。1本は幅広で浅いというような3本の溝。幅広の所は溝の底が擦れていて幅が狭いところは全然擦れた跡が無く、溝の間の摩擦したところがある。加えて四角い穴が二つある。それをどう考えるか。当時の建具形式を考えると、2本引きの板戸に障子1本入れる形式の三本引きの建具形式と考えるのが一番いいと思います。板戸の方は細い2本の溝に収まり、戸が外れないように縦に降りている板をガイドレールに、幅の広い方は障子の下框が溝にはまっていて、どっちにも行けるようになっていたと考えました。また板戸と考えた溝に伴う穴は、戸締りのための栓だろうと推定できます。このように敷居1本から建具がどういう風であったかということを考えます。

一方で道路と道路に挟まれた部分しか復元しなかったので、屋敷の中はどうなっているかということですが、多少削られて不確実な部分もあったので想像も含めて模型で作って示しました。

3、江馬氏館跡の建物復元

そういった一乗谷の考え方をしながら江馬をどういう風に考えるかということ、最初にも言ったように史跡江馬氏城館跡の特徴は何なのかということ、飛騨市が最近策定した保存活用計画にもまとめましたし、整備の報告書にも書きましたが、大きな特徴として「群として機能していた中世城館の形態をよく示している」ということです。群というのは周囲に山城がいくつもあってということなんです。それと庭園を持って堀をめぐる「飛騨の花の御所」のいうべき状態、「中世武家庭園として、地方では非常に早い時期の物」でこれは庭園の一番の価値です。そしてもう一つは「地方の個性」がある。庭園にはこの地域の石が使われており、「遺構の保存状況も良く、全国的に貴重である」といったポイントが挙げられます。

じゃあ何をしようとするのかということ、最終的にはいろんなことを考えながら、どの程度手を入れるのかは別として皆さんに知っていただくようにすべての山城も含めて何らかの手を入れて行く必要があるでしょう。山城に関しては復元ではなく、登っていただいて景色を見ていただいてそこに何があったのかということを知っていただくだけでもいいのかもしれない。こういう仕事は税金をつかう訳ですから地域の方々にとってどれだけの費用を使って、どう維持していくのか常に見つめながら仕事をやって行く必要があると思います。今回のポイントは、まだその時は名勝庭園になっていなかったのですが、江馬氏館の特徴である非常にいい庭園を持っていることをきちっと知っていただくことに絞りました。発掘庭園として「あそこを名勝指定にもっていくんだ」という意気込みで仕事をやってきました。その結果あの庭園が史跡とともに名勝となったということです。そういうことで庭園にポイントをかなり絞っています。ですから庭園をめぐる周囲の土塀は本物の復元の仕方にしましょう。そこから先の外れるところは主門の両脇は見た感じはちゃんとしようという意味で、向かって左手の方には土塀の芯が左右違いますが、外から見たときの体裁をそろえました。入口の門をちゃんと見せて塀や堀がある館の雰囲気を知っていただく。そして庭園とセットになる建物(SB46)をきちっと復元しましょう。そしてその建物と門塀のところを結ぶ塀も作りましょうとポイントを定めています。それ以外の建物は皆さんご存じのように大きさを示すようなステージにしました。上を作らずに建物の範囲だけを示すため板敷の状態にしています。そこは子供たちが来た時に弁当を広げてもいいし月見をしてもらってもいいそんなことを考えました。でも一方では60cmほど持ち上げた下に少し建物の雪囲いの材料をしまうような収納にしたほうがいいとか、いろいろなことを考えながら建物の範囲を示して半立体的に示すというような仕事をしています。脇の門付近からは輪郭を示すために塀を作らず植栽で形を作りました。堀外の地区も最初は考えていたのですが、ちょっと予算などいろいろ難しいので先送りしています。そういうように範囲を決めて復元していったわけです。

江馬館の直接資料は出てきた遺構です。間接資料というものは地形だとか建物の配置とかいろいろなものを考えています。庭園はしっかり分かります。関連資料は、飛騨で建築文化的にどのような状況か考えました。飛騨地域に中世の建物はどんなものがあるかと見てみますと、国宝の安国寺経蔵。それから荒城神社本殿とか熊野神社、すぐそこには薬師堂など中世の建物が飛騨地域には9つほどあります。そういったものを参考にしながらこの地域にしか見られないような特徴的な部分はあるのかなのかということを検討しました。その結果、それほど大きな全国的な意味での差異はない。ただ全部がこけら葺き・板葺きだという状況が見えてきました。それからこの時代の建物はどのようなものがあるのかというと、類似するものは、大津の園城寺光浄院客殿とか、慈照寺東求堂とかが、江馬の想定する時代の建物に近い例として参考にします。それから門は、京都の教王護国寺(東寺)東門が規模や時期が近いので参考にしました。絵画資料としては一遍上人絵巻や信貴山縁起絵巻だとかを見ながら土塀などがどうなっているか見ました。それから大工の木割り書である『匠明』によって、柱の大きさと垂木の大きさの比率をどのようにするのかという当時の大工の考え方を参考にしました。門と建物の間の塀をどうするのかという時には、この塀は掘立柱であることから、板塀と推定して中世の絵を見ました。それから、館周囲の土塀についてですが、それはどのようになっているのかも絵巻を見ながら考えました。土塀は下から層に積んでいくのが本来なのですが、この少し後になります。江戸時代の初め頃になると、金沢の武家屋敷の土塀などにみられるように、蔵を作るように団子状に土を積んで間を詰めて行く仕事をやっています。そういったものが少し早くあっても良いのではないかと考えました。平城宮跡のように築地塀できちっと全部下から棒で突いて固めてつみあげる方法は、平安時代になると、それがかなりの部分で崩れており、中に芯を入れるなどいろいろなやり方が絵巻の中にみられます。じゃあ江馬の館はどうしたかという、箱形の土を固めたブロックのようなものを両脇に積んでその間を詰めていくという方法で、皆さんの協力を得て共につくるというのも良いだろうと思いつきながらやりました。ブロックの中には、子供たちやお手伝い頂いた市民のみなさんに手形を入れてもらったものもあります。そういう風にして芯は若干当時の手法とは違いますが、中まで土で作りました。このとき、この方法がどの程度持つかということを見るため、最後の仕上げ塗などを含めた試験を行ったうえで、最終的な施工をしました。

また、この会所と考えられる復元した建物は庭園を中心に考えますから、庭園と建物のとりつきというのが非常に重要と考えます。整備した庭園は本物と同じレベルです。庭園周囲の基礎の遺構は発掘をやった時に上が削られていることが分かりましたので、本来の位置まで持ち上げるということは削られた面を保護しながら作るということになりますので、作った礎石の位置は最終的には(当時と)ほとんど差はない位まで持ってこられたと思っています。安全を考えるとあと20cmほど懐の余裕があると仕事がしやすいのですが、それをやると先ほど言ったような意味で(高さ・目線が)変わってくるので、20cmくらいの間でコンクリートのベースをうって保護をしてそこに礎石を据え付ける。ですから地下の遺構は守りながら、上は見えないようにきちっと作るという仕事をやって建物との取

り合い関係を想定した高さに持っていくというようなことをやりました。ですが見るとほとんど違和感が無いのだと思います。建物の舞良戸^{まいらど}、専門的に言うと横に棧があるのが横舞良、縦にあるのが縦舞良といいまして、どちらもあるのですが基本的には横の方が多いです。横の舞良戸2本が引き違いになって障子が1本だから普通建具を考えた時、引き違いになると半面だけが開きます。そこから外の空気を入れずに明かりだけを取り入れたければ、障子を閉めれば明かりが入ってきます。また空気を入れたい場合は板戸を引いている方に障子も引いてしまえば半分が開きます。全開にしたければ、建具を全部取り外すということになります。それからもう一つ、古風にしたかったので蓐戸^{しとみど}というものを入れました。平安時代の寝殿造からずっと出てくるもので、下半分は差し込みで取り外し上半分は跳ね上げるという戸です。証拠はないのでわかりませんが、少し古風な雰囲気にした方がいいのかということで真ん中に蓐戸を入れました。それに対してこちらの外の控えの間に近いところは舞良戸にしました。そういう違いを入れたのは、この江馬の時期くらいから大きく変わって来て、現在の建物の状況に近い形に変わってくることを皆さんに知っていただきたいからです。障子や腰高障子が使われるのは、本来裏側に板戸がないところで、この建物の入口に近いところにあるのをご存知かと思います。保護のために板戸を作っているのですが、あそこは本来1間中に入っています。軒先との関係で言うと板戸が廻っているのは雨風があたりやすいところ、凹んだところは腰高障子と言って腰の部分に板があって上に障子というものが中世の後半から出てきます。これが障子と板戸が別の場所についてくるようになります。板戸が外に付くと雨戸となりますが、この雨戸、記録上は秀吉の聚楽第が一番古いとされています。だから江馬の時期にはまだ雨戸が無いと思いますので三本引きの溝、そしてこの蓐戸の中に障子を引き違える形をとっています。蓐戸にすると非常に開放的に見えてきます。庭園を眺めるということと両方を考えて古風にということ。これをやることによって跳ね上げた蓐戸から額縁のように庭園が見えるとか、眺めをどう確保するか、そういう空間を意識して検討したものです。畳は敷きつめて良いだろうと考えながらやりました。主門は(礎石は見つかりませんが)寸法などから礎石を抜き取ったと推定しました。土塀と考えた部分の基礎がちょうど途切れた場所、その寸法と堀が繋がってなくて、これの前だけが土橋として残っているので、ここは門だと分かりますし、この寸法から考えて、東寺の東門が最も近い例でした。この当時の主たる門は基本的には四脚門と言って扉を構えるところに2本の柱があって、前と後ろに控え柱が4本立ちます。そういう構造と考えるのが素直な考え方だと思います。ちなみに北の門は柱が2本なので棟門という形式の門で、掘立で礎石は持たない。そういう考え方で復元しています。

解説したブックレットもありますので、春になったらまた本物と見比べてみてください。

4、まとめ

遺跡整備の一手法として建物を復元するという点に関してはいろいろな批判・反論もあります。この説明でも言いましたが、分からないことはかなりあります。研究論文ならここまでわかりました、ここからは分かりませんが、現地で作るとなると分からない所も含めてやらないと建物はできません。ですから多かれ少なかれ推定する部分が出てきます。推定するから一つの考え方が固定されてしまいます。「それは避けるべきだ」という批判もあります。でも一方でじゃあなにも無くて皆さんが想像できるかという、専門家の反対する方々はいろいろ知識があつて想像しているいろいろなことが言えますが、一般の人が頭に描きながら状況を想像できるかというとなかなか難しいです。どのようにやろうかということはケースバイケースで考えながらですが、ある程度復元することのメリットもあるのではないかと考えています。それをやろうとすると考古の人間だけでは難しく建築として上の建物はどうだったのかということや常に考えながらやっていかないといけない。遺跡調査では私のように建築をやって発掘をやっている人間というのは非常に少ないのですけれど、そういう人がいないとなかなかうまくいかないことが多いと思います。それから間接資料はいろいろ出てくる遺物、一乗谷で言うとお茶の道具や遺物が大事です。ちなみに言いますとお茶道具の出土点数はお茶の最先地域と言われる堺より一乗谷の方が多いい位で、そのくらい一乗谷ではお茶が盛んであったということが見えてきます。そして先ほど言った庭園もそれぞれの屋敷にあつていろいろなことがある。本能寺文琳だとか朝倉文琳だとか言われている江戸時代のお茶の大名物、非常に重要視された道具の中には一乗谷から出て行ったという伝承を持つものも多くあります。そういう中で一乗谷をどう茶の文化と結びつけるのか。当時どういう状況だったかいろいろなことを考えて行くことが大事なのだと思います。それから建物復元のための学際的取り組みは、建築の私だけで分かる事ではなく、発掘をやって遺物を分析し、その意味を検討する人など、いろいろな人が関わる中で見えて来るものが多いです。ですからいろいろな人がいろいろな目でやって行く中で、生活全体が見えてくるのだということです。

そしてもう一つ最後に言いたいのは建物復元事業の報告書をしっかり刊行することが大事です。以前整備したもので、できてはいるがそれがどういう過程を経て作られたものかは専門家にもなかなか見えてこないで批判しようにもきれいなものもあります。ですから作ったらどう理由でどこまではこういう事実に基づいてやったとか、ここは分からないのでこういうものを用いて想像しましたということをはっきりさせてやることによっていろいろな考え方がまた次に出て来るのだらうと思います。わたしが教えていただいた坪井清足先生は文化功労者で、先にお亡くなりになりましたが、生前先生は私に「お前の作った物でも木造なのだから2、30年したら腐るだろうから修理しないといけない。その時にまた新しい研究によって新しい技術でつくりなおせばよいだろう。」というように、おおらかにおっしゃいました。今分かっていることをやるのも一つの方法だと後押ししていただいたのです。

遺跡整備の今日的課題の1つは、「遺跡を都市全体の中で眺めること」です。遺跡を都市という

言葉で代表させましたが、地域の中でどう眺めていくのかということ。そうしないとその遺跡だけがぼつんとあったのでは多分ダメなのだと思います。地域の中でどう嵌め込まれてどう生きていくのかということがないと皆さんに親しまれない。場合によっては過密化した都市の中にある重要な遺構なら無理に復元せず緑地としたうえで、地下にはこういうものがあるのだときちっと示し、皆さんの公園として残すことも場合によってはあると思います。いろんな意味を考えながら、地域の中でその場がどういう意味を持つのか常に考えながら遺跡の整備をやるべきだと思います。そしてもう一つは「時間を追ったプロセス整備」です。事業として実施する上で、遺跡整備は長期にわたる場合が多いことから、完成時の景観とともに見落としがちである途中経過を念頭に置くことも必要です。段階を追って常に変えるべきものであり、1回整備したら終わりというのは絶対にダメだと思っています。史跡外（周囲）と連関し、地域住民と共に持続的に働きかけていくことが必要と思っています。そんな思いでこの仕事をやってきました。時間が来ましたので私の話を終わらせていただきます。

— 了 —

3、江馬氏館跡の建物復元

- ・ 史跡江馬氏城館跡の特徴
 - 群として機能していた中世城館の形態をよく示すこと
 - 「飛騨の花の御所」ともいうべき往時の江馬氏の勢力を物語ること
 - 中世武家庭園として地方における早い例であるとともに中央と地方の文化の流れを示すこと
 - 地域の個性を表徴すること
 - 遺構の保存状況も良く、全国的にも貴重であること
- ・ 復元対象とした建物 — 土塀、主門、礎石建物 SB46、塀 SA47
- ・ 建物復元の考え方
 - 検出遺構に基づく
 - 直接資料、間接資料
 - 関連資料
 - 現存建物（中世）
 - 飛騨地域 — 安国寺経蔵、国分寺本堂、照蓮寺本堂、荒城神社本殿、阿多由太神社本殿、熊野神社本殿、薬師堂、久津八幡宮本殿・拝殿
 - 類似する建物 — 園城寺光浄院客殿、慈照寺東求堂、教王護国寺東門
 - 絵画 — 一遍聖絵、信貴山縁起
 - その他 — 木割書『匠明』

4、まとめ

- ・ 遺跡整備手法としての建物復元の課題
- ・ 遺跡整備の今日的課題
 - ① 遺跡を都市全体の中で眺めること
 - ② 時間を追った(プロセス)整備